

平成29年度 聖光中学校（国語） 解答・解説

解答

- ① 再考 ② 拝観 ③ 礼節 ④ 好転 ⑤ 誤植

- ① あおすじ ② ぐうのね ③ しんかつ ④ おおぶね ⑤ むつまじい

三

- 問一 問二 問三 問四 問五 問六 問七

A オ B ウ

四

- 問一 問二 問三 問四 問五 問六 問七 問八
- A オ ウ イ ウ イ エ エ
オ ウ オ ウ ウ や や や
B ウ ウ ウ ウ ウ や や や
ウ ウ ウ ウ ウ や や や
イ ウ ウ ウ ウ や や や
エ ウ ウ ウ ウ や や や
ア ウ ウ ウ ウ や や や
涙や、震えや、固く結んだ拳

問八 每年農作業を手伝ってくれている人達を誰も認識出来ないでいることを気に病みつらく悲しく、覚えているのは亡くなつた夫と息子のことだけで寂しい気持ちになつていて。（79字）

解説

三

- ・見えないものに名前を付けることで、具体的に存在する対象としてとらえられる点。（38字）
- ・ある言葉で括ると、さまざまな違いがあつても、なんとなく一塊にして捉えられる点。（39字）

問二 つぼみの母がお父さんの介護に来たことを知った人生は、つぼみも一緒に来たのかと尋ねる場面です。「あたし……来なかつた」と言いよどんだのは、母と一緒に来なかつたことに後ろめたく引け目を感じたからでしょう。また、「病氣ですっかり生氣を失つた父を見るのが怖かった」と言つています。

問七 ア 人生とつぼみは、まだ「強い絆」で結ばれていません。
イ 「膝を抱える」という表現は亡くなつた父に対する喪失感ではなく、祖母の話に聞き入っている様子です。

ウ 祖母の回想場面で、父の言葉を「」を付けずに書かれており、その場にいない父の存在を読者に意識させています。

エ 傍線④の2文前では、「目をほんのりとうるませながら」とあるので、笑顔を絶やさないのであります。

オ 「……」は、胸がいっぱいになつたり、何かを言いよどんだりするときには使い、本文では、人生が祖母の話を真剣に受け止めている様子が書かれているので、「お互いの真意を測りかねている様子」ではありません。

問八 二重傍線では、人生が祖母の現状を初めて理解していきます。毎年農作業を手伝ってくれている近所の若い衆の顔を認識できず、気に病み悲しんでいること、覚えているのは、自分を見守つてくれた夫や息子のこと。し

かし、夫や息子はなくなり、また近所の人は誰なのか認識ができないのですから、まさに独りぼっちの状態です。

問一 A 「いろいろやってみた結果。結局のところ。」 良くない結果になる場合に用いる。

B 「言い表すことも出来ないほど、すぐれている」という意味。

問六 「言葉などで表現され」 ていますが、「ある感覺が共有され、流通する客觀性をもち得た」のは、ア

イズれも「言葉などで表現された」場合です。

問八 「ヴェールとしての言葉の二種類の機能」 が問われているので、「このヴェールの二様の働きは、言葉にもあ

ります。」の一文から始まる段落をまとめましょう。